



笑いを作りあうこと

寒さも一段と厳しくなってきました。このところ、暖かな日が続いたかと思うと急に寒くなるなど、寒暖差が例年にならない気候になっており、地球温暖化の影響を肌で感じております。巷ではインフルエンザの患者数が増加していますので、日々の感染対策をしつかり守ること、症状が出た場合の対策を実施することで、ご利用者の健康が支えられますことを願っております。

2024年11月7日の朝日新聞に折々のことば(鷲田清一著)をご紹介します。

「なぜなら、笑いとは、人間が作るしかないものだからです。」

井上ひさし

生きるということには、苦しみや悲しみ、恐怖や不安などがどれでもこれも詰まっているが、笑いは入っていないと作家は言う。笑いは待っていても起こらない。笑いは人の内にはなく、誰かと分かち合って作るほかないもの。「人が行く悲しい運命を

忘れさせるような、その瞬間だけでも抵抗できるような」いい笑いをみなと作りあいたい。「ふかいことをおもしろく」から。

笑いは、人間の関係性の中で作っていく：シャローム横浜には100名以上の方が生活し、そこに様々な職種の多くの職員が仕事を通じて関わっています。挨拶したり、体調を聞いたり、普段の何気ない場面でも会話をしています。施設内を歩いていると、職員やご利用者ご家族等の笑い声が聞こえてきます。お互いの関係性の中で会話を通じて笑いあっている姿を見て、いい笑いを今後も皆と作りあいたいと感じています。

新たな年を迎えるにあたり、無事に新年を迎えられた感謝と同時に、1年前に起こった能登半島地震のことを思い出します。その方々に思いをはせながら、皆が笑いあい、笑顔で新たな年を過ごせますようお願いいたします。

施設長 高原信夫

屋上で過ごす、ほっこりしたひととき

急に寒くなったり、暖かくなったり、気忙しい師走を迎えました。

そんな中、暖かい日を待ってケアハウスの屋上でご利用者に日向ぼっこを楽しんでいただきました。普段はフロアで過ごされているご利用者ですが、屋上へ出ると皆様気持ちいい〜とホッコリした表情をされていました。

また、ケアハウスの屋上では、ケアハウスのご入居者がお花や野菜を育てていて、「これは何のお花かしら？あっ！あれはイチゴね！」と会話も弾み、楽しいひと時を過ごすことができました。

4階課長 松岡 勇次



第 293 号

令和6年 12月 15日 発行
(毎月1回 15日 発行)

責任者:施設長 高原信夫
〒241-0802
横浜市旭区上川井町 1988
社会福祉法人
アドベンチスト福祉会
シャローム横浜
☎045-922-7333

編集委員
荒金・石川・石橋

<https://www.adventist-welfare.jp/yokohama/>



1 日 の お 仕 事

ハウスキーピングの仕事は、まずショートステイで入所する部屋のシーツ交換と清掃から始まり、1F～4Fに分かれて各部署のゴミ回収、床清掃、トイレ清掃と作業していきます。



時々トイレ詰まりや嘔吐の二次処理で呼ばれたり、居室移動の時に急ぎで清掃してほしいなどありますが、キーピング内で協力しながら時間内に1日すべての作業が終わるように心掛けています。

ハウスキーピング 竹淵 順子

菜食弁当の提供とその工夫

栄養課では、春、秋に年に2回、セブスデーアドベンチスト教団から菜食弁当の依頼があります。食数は40食前後、菜食なので、肉類、魚類を使用しないお弁当をお出ししています。



今回のお弁当献立は、きのご飯、蒟蒻のチリソース、干草卵焼き、お煮しめ、南瓜のシナモン煮、バスマティライスと緑豆のエスニック春巻き、大豆ボールの磯揚げです。

栄養課では、できるだけお客様のご希望に添えるようなお弁当づくりを心がけています。

栄養課 課長 小寺 秀偉

ベテテルをわが岩、わが城、わが救いの場所に

第201回 チャプレン 上前 至

11月末、私は、沖縄で問題を抱えている児童のために支援を行っている私共の施設「ベテテルの夢Ⅰ、Ⅱ」を訪れた。そこは学校に行きたくても行けない子、いわゆる登校拒否の子や、発達障害を抱える子達の「逃れの場所、隠れ場所、そして救いの場所」となっている所でもある。中には学校には行けないけれども、ベテテルだけには、きている子供もいるという。そういう子にとってはまさしく、その場所こそが「逃れる場所、その子の岩、城、救いの場」となっている事を実感する。

ベテテルの夢Ⅱは放課後等デイサービスの機能もあり、そこでは放課後、学校では味わえない近くの自然公園に行ってみんなで遊ぶ時間を持っている。そこにはみんなが来てくれるのをいつも喜んで待っている犬がいた。以前は犬にさわれない子もいたという事であるが、その犬との触れ合い

を通して今は犬と遊べるようになった子もいるという。ベテテルⅡにこなければ決して味わう事ができなかった経験とも言える。

なりよりも嬉しかった事は近所の小学校を尋ねた時、その学校の子供達の何人かが「あ、ベテテルの先生だ」と言ってこちらに目を止めてくれた事である。それだけ、子供達にとってベテテルの施設が無くてならない施設になっている事を実感できた事であった。この子供達にとって「救いの場所」となっているベテテルを私共は決して無くしてはならないと誓いを新たにした。

「主はわが岩、わが城、私を救う者」

詩篇 18 編 2 節

